

## 忍辱太子譚の享受と展開：『直談因縁集』巻四第十三話を中心に

森, 誠子  
九州産業大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/2544330>

---

出版情報：語文研究. 125, pp.30-38, 2018-06-09. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 忍辱太子譚の享受と展開

— 『直談因縁集』 卷四第十三話を中心に —

森 誠 子

## 一、はじめに

父王の病を治すために両眼を抜くといった「自己犠牲の孝」<sup>(注1)</sup>を伝える代表的な説話の一つに忍辱太子譚がある。これは、釈迦の本生譚を収める経典『大方便仏法恩経』卷三「論議品第五」<sup>(注2)</sup>及び『経律異相』卷三十一「忍辱為父殺身三」<sup>(注3)</sup>に見られる。金英順氏は、東アジアにおける「自己犠牲の孝」について考察する中で、日本における忍辱太子譚の受容について、以下のように述べる<sup>(注4)</sup>。なお、引用が長くなるが、本稿にとっても大変貴重な指摘であるので、それを踏まえた上で考察に進みたい。

忍辱太子譚は、日本では、本生譚と孝養譚の二つの系統に分けられる。『今昔物語集』では、太子の父母の父母孝養と、利他行の両面が協調される特色をみせ、仏の眞実を体得する本生譚のあるべき姿が描かれる。そして本生譚型の忍辱太子譚のもう一つの特徴としては、『説経才学抄』や『三国伝記』、『金玉要集』等に見られるように、叙情的な文飾が加えられ、太子が文殊の過去とされたり、様々な変相をみせる。このような変化は、法会などの教説の場においてこの話が頻繁に語られていた過程を示すとみませよう。

一方、『東大寺諷誦文稿』や『言泉集』では、忍辱太子譚が本生譚の枠組みから離れ、報恩や孝養に収束する孝養譚へ変換されている。法会の場において、我が身を捧

げ、父の命を助ける太子の自己犠牲は、究極の〈孝〉を説く仏教説話としての意義を担っていたことが考えられる。また、忍辱太子譚の目ぬきの自己犠牲の〈孝〉のモチーフは、法華経直談系では観音靈驗譚や目眼寺の縁起として語られ、本生譚とは異なるテーマに再生して語られ、さらに、浄土宗系の『五重聞書』の俱那羅太子譚にも混交して語られ、孝養譚として強く意識されていたと考える。

天正十三（一五八五）年写の『直談因縁集』は、日光輪王寺の天海藏に伝来する直談系法華経注釈書である。具体的には、法華経二十八品の順に従いながら、説話を実証例として用い注釈したものである。阿部泰郎氏は和泉書院版『直談因縁集』「解題」の中で「本書生成の場であつたらう天台寺院や談義所の枠に止まらず、より汎い室町時代の都鄙の人々の息吹に満ちている。それらはまた、聖界の内側からのみ覗かれたものでなく、当時の世俗の風儀や感性を豊かに伝える言葉として立ちあらわれ、その幾許かは、芸能にも通ずる趣きをもっている」とする。<sup>〔注5〕</sup>

そこで本稿では、金氏の御論を出発点に、忍辱太子譚を記す『直談因縁集』巻四「人気品下」第十三話を中心に据えつ

つ、他文献に記される忍辱太子譚との比較を通じて、中世後期から近世前期における忍辱太子譚に纏わる言説展開の様相を、より詳しく明らかにしていきたい。

## 二、『直談因縁集』所収の忍辱太子譚について

『直談因縁集』巻四の第十三話では、忍辱太子譚を以下のように記している。なお本文は、私に書き下し、補った仮名と訓読した助動詞は平仮名で記し、適宜濁点を施した。

一、柔軟ト云ふに付きテ。如来、常ニ道往キ玉フニモ、草木ヲ礼拜シ玉フ。時に、阿難・迦葉、不審ニ思ひ、問イ奉る。仏云ふ。サレバ、因縁アリ。過去遠々ニ、香首大王ト云ふ王アリ。病床ニ臥すニ、種々ノ薬、無辺ノ医、数ヲ加ふレドモ、終ニ此の病、治らず。有る時、人來たりテ、世間ノ常ノ薬ニハ非ざる、安き薬に候ふ。是ヲ呑み玉ハ、平愈セン、ト。何ト云ふニ、十三已上ノ柔和ナル者ノ両眼ガ薬なり。之を食セ、治るべしと云云。時に、尋ぬるニ、十三迄腹立セざる者ハ、惣ジテ之無し。而して、此ノ、王、(脱文アルカ) 十三に成り玉フ。十三迄、終ニ腹立せず。時に、太子、思し召ス事ハ、吾コソ十三

二成るガ、今迄、終に腹立せず。親の為ナレバ、我両眼ヲ奉らん、ト云ヒテ、武士ヲ召シテ、万事、我魂ヲヌキ候へ、ト云云。如何ト申すニ、父ノ病ニ、十三迄腹立せざる者の両眼ガ薬ト成る由、聞き候ふ。十三成るガ、吾コソ腹立せずと云云。時に、此の人、口惜しき事かな。帝王の命、全うセント思し召す事モ、偏ニ太子ノ御為ナリ。又、臣下ヲ始め、下位ニ至リテ、以後ハ太子コソ何トモ仰ぎ奉るべし、口惜しき御事かな、ト頻リニ申す。サレドモ、汝、我が両眼ヌカズンバ、我、自害セン、ト云云。時に、両眼ヲヌキ、王ニ奉ル。是ハサテモ何方ヨリ尋ぬルヤ、ト云云。外に求め奉ると云云。之を食すニ、相違無く治リ玉フ。時に、サテモト、委しく尋ぬ。太子、何方□候ふ、此の事蹟はるるなり。サレバ、言語道断ノ事、是如何、ト候ヘドモ、力無し。其ノ時代、クル孫仏ト申す仏、世ニ御座す。所詮ハ人力ノ及ばざる所なり。仏御座す、幸なり、ト云ヒテ、仏ニ問ひ奉るニ、心安く思し候へ、ト云ヒテ、内裏へ入り来たり候ヒテ、七日説法アリ。時ニ、太子ノ両眼、本の如くなり。時ニ、王位、備ハリ玉フニ、柔軟ニ御座する故、四海ノ人民、安全、天下ヲ納むルなり。而して、父ノホウギヨシ玉フ時、太子、多くノ塔婆ヲ立て、御菩提を訪ひ玉フなり。其ノ時

の太子トは、今ノ我なり。而して、其ノ率婆(ソウバ)、充滿ノ今モ、夫眼前ニ見ユル故ニ、我、礼拝ス、ト云云。柔和ノ人者ガ又、親ニモ孝行なりと云云。

これは『法華経』「授学・無学人気品」にある「柔軟(注6)」についての注釈である。和泉書院版『直談因縁集』巻末にある類話一覧には、本話（以下、本話といえは『直談因縁集』巻四第十三話を指すものとする）について類話の指摘は無い。しかしながら本話は、「忍辱太子」という名は記され無いが、一連の忍辱太子譚の筋立てと大変よく似ている。本話の内容について、記述の順にA〜Lとして記すと、以下の通りである。

- A 如来が草木に礼拝するのを、阿難・迦葉が尋ねる。
- B (香首) 大王が病に臥す。
- C 十三歳まで柔和なる者の両眼が薬と言われる。
- D 太子は十三歳まで腹を立てなかった。
- E 武士を召し、問答の末、両眼を抜き、王に奉る。
- F 王の病が治る。
- G 王が事実を質して、クル孫仏に尋ねる。
- H クル孫仏の七日間の説法があつて、太子の目が治る。
- I 太子が王位に就く。

- J 王が崩御し、太子が多くの卒塔婆を立てて弔う。  
 K 如来が太子であったことを明かす。  
 L 柔和であることが親孝行であると説く。

次に、諸書に記される忍辱太子譚及びその関連話について、以下のように整理をした(以下、該当する文献は、丸数字にて示す)。

【本生譚として】

- ① 『今昔物語集』巻二—四  
 ② 名古屋大学蔵『百因縁集』十一  
 ③ 真福寺蔵『説経才学抄』「因縁処」  
 ④ 『私聚百因縁集』巻一—十四  
 ⑤ 『三国伝記』巻三—十  
 ⑥ 内閣文庫『金玉要集』巻五—三  
 ⑦ 寛永刊本『釈迦の本地』  
 【孝子譚として】  
 ⑧ 『東大寺諷誦文稿』  
 ⑨ 金沢文庫『言泉集』  
 【直談系説話として】  
 ⑩ 『一乗拾玉抄』巻八

- ⑪ 『鶯林拾葉鈔』普門品五  
 ⑫ 『法華経直談鈔』二末序品四十七

三、忍辱太子譚の変容

本話の特徴を明らかにするために、「二」に示したA～Lの筋立てと文献①～⑫の記述内容とを比較したものを表に示した。なお、本話と概ね一致するものを○、記述が無いものを×、部分的に一致するものを△とした。しかしながら、△については、異なる内容が文献によって区々のため、詳細は後に記す。また、便宜上、●・▲・※1～3としたものについて、詳細は後に記す。

⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①		A
△	△	△	×	×	△	×	△	△	△	△	△	△	B
○	○	○	△	×	×	○	○	○	○	○	○	○	C
△	△	△	▲	×	×	▲	△	△	△	△	△	△	D
△	△	△	△	×	×	×	△	○	△	△	△	△	E
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	F
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	G
△	△	△	×	×	※1	※1	※1	※1	※1	※1	※1	※1	H
△	△	△	×	×	※1	※1	※1	※1	※1	※1	※1	※1	I
×	×	×	×	×	※1	※1	※1	※1	※1	※1	※1	●	J
※3	※2	※2	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	K
×	×	×	×	×	○	△	○	○	○	○	○	○	L
×	×	×	×	×	△	×	△	△	△	△	△	△	

まず、直談系説話以外の文献①～⑨について、確認してきたい。Aについて、①では、如来が礼拝する理由を尋ねた人物名として、阿難・迦葉以外に、舍利弗・目連と記す。<sup>注8</sup>②・⑤の文献も①と同様である。阿難・迦葉の二名のみを記したものは、本話以外に、管見の限り無かった。次に、B・C・Dの記述内容について、①では王が病になったときの年齢、そして、両眼及び骨髓を抜いた年齢を「十余才」とし、特定の年齢を記していない。加えて、その太子の死に対して、母后が悲しんでいる様子が記されている。これは、⑥以外の文献には同様に見られる記述であるのだが、本話に母后は登場しない。加えて、懷妊祈願の末に母后が太子を身籠ったとする記述も、③⑥⑧⑨以外の文献には記されるが、本話には無い。さらに、D・Eについてである。①では、父の病を治すためには、「生じてより以来、露許も曠志を不発人の眼及び骨髓を和合して付ける」とある。これは②③⑤も同様に、両眼及び骨髓が父王の病に効くということで、太子は父のために犠牲になったとする。なお、⑥の▲についてであるが、父王の病を治すためには、子どもの肝が必要だと言われ、太子が我が肝をささげたとする。父王のために捧げたものが、先述の「目と骨髓」に対し、⑥は「肝」と差異が大きいため▲として記した。また、⑨では「人ノ肉」とあり具体的な部分は

記されていないので、⑥同様▲とした。これに対し、本話と同様に、父王の病を治すために「目」を抜いたとするものは⑦のみである。ちなみに④と⑦は、王が病となった年齢を十三歳とするが、④は①②③⑤同様、父王の病を治すために「眼と骨髓」を抜いたとする。なお、③は、その年齢を十五歳としている。以上の結果から、『直談因縁集』に最も近い筋立てであるのは⑦となる。

しかしながら、病が癒えた後の父王について、これを記す①～⑦と本話とでは、大きく異なる点がある。①～⑦では概ね、父王の病のために太子は我が身を犠牲にして命を落とした。結果、治癒した父王は、太子の供養のために卒塔婆を建立したとする。これに対し本話では、太子は盲目となるだけで命は落とさない。そうして、父王の死後、父王の供養のため、卒塔婆を建立したとする。先ほど同様、大きな差異であるため、表中の①～⑦のG・H・Iの欄に※1とし、また卒塔婆の建立については、●として記した。なお、⑧⑨は、卒塔婆建立に関する記述は無い。

次に直談系説話⑩～⑫についてである。これらは忍辱太子の説話とせず、⑩・⑪は楊柳観音の靈驗譚、⑫は目眼寺の由来を説く説話となっている。例として⑩の該当本文を掲げる。なお、本文は私に翻刻し、適宜読点を補った。また、判読不

能の文字については■とした。(注9)

一つ、楊柳観音ノ因縁の事、玄奘三蔵渡天ノ時、三百六十ヶ国斗廻リテ、有ル堂ニ參ルニ、本尊ハ右ニハ楊ノ枝ニ目ヲ二開ケテ、左ノ手ヲバ施無畏ノ印ヲ作シテ、立玉フ、カ、ル処ニ老僧、鹿杖ニスガリテ来玉フ、此由ヲ問ヘバ、■玉フ様ハ、此国ノ王、御惱ノ時、薬師申様ハ、十五ニ成マデ親ヲ不毗一、腹ヲ不立一、人ノ目ノ玉ヲ以テ、薬ヲ合テ、可奉一云テ、諸国ニ札ヲ立テ尋ルニ無、此ノ王ノ太子一人御座スガ、宣フ様ハ、我コソ十五ニ成ガ未ダ親ヲモ毗一、腹ヲモ不立一問、我ガ目ヲ拔テ薬トセント宣フ、聽テ拔テ薬トスル也、王忽ニ平愈ス、サテ太子ヲバ何ガセント歎時、天ニ告テ云、法花ハ五眼具■ノ経ナレバ法花ヲ可ト読一云、王七日法花ヲ読誦アルニ、老僧一人、王ノ枕本ニ立寄テ、柳ノ枝ニ目ニ開ルヲ以テ、王子ノ目ヘ副玉ハ、可ト如ナル本ノ一、■テ失ン、夢覺テ枕本ヲ見バ、柳ノ枝有、是ヲ取テ副ケレバ、王子ノ目、如本一也、観音法花一鉢ノ故也

話の骨格は、本生譚及び孝子譚として記される①～⑨の忍辱太子譚ともおおむね一致しているように思われるが、これら

直談系説話⑩～⑫では、太子は父王の病の治療のために目を抜くものの死には至らず、後に観音の靈験により目が元通りになるという点が、①～⑨とは異なる点である。そうして、本話もまた、⑩～⑫と同様の展開を記す。

しかしながら、⑩⑪では太子の生まれ変わりである語り手が玄奘三蔵となっているなど、本話や、また①～⑨の忍辱太子譚と大きく異なっている。また、表中に※2として示したが、⑨⑩では卒塔婆の由来について楊柳観音の靈験譚とし、※3とした⑪では、目眼寺の由来を説く話になっている。これも、本話や①～⑨の忍辱太子譚とは異なる点である。

さらに、父王の病のために目を抜く話としては、クナラ太子の話も想起されよう。クナラ太子の目抜き譚については、金英順氏の先述の御論とは別の詳しい考察がある。(注10)クナラ太子の場合、目を抜くに至る経緯は、病にかかった父が太子に王位を継承させようとしていることを知った継母による偽宣旨によったものであったり、太子への恋慕を拒絶された母が恨みから父の病を利用したり、その中には、父は病ではないのに太子を憎む継母が父による宣旨と偽って目を抜くよう仕向けたり、というものもある。また、クナラ太子が目を抜く話の中には、父に対する孝行というモチーフが無く、継母の讒言等により抜いたという話もある。

このように、忍辱太子とクナラ太子とでは、父王の後の立ち位置や役回りが大きく異なるが、どちらも、物語上強い印象を与える存在として后が登場する。しかしながら、本話には、そうした女性の登場が見られないのも特徴であろう。

以上の結果から、本話と最も近い筋立てであるのは⑦であることがわかる。しかしながら、直談系説話である本話と、現在お伽草子に分類される⑦とでは、表現面や語り口、また語られる場が異なっている。だが、それらの言説が同一の土壌から生み出されたということは、窺えるのではないだろうか。

#### 四、「柔和忍辱」について

最後に、忍辱太子の話が、なぜ『法華経』「授学・無学人氣品」にある「柔軟」の注釈と結びついていったのか考えたい。『法華経』の「法師品」には、「如来衣者、柔和忍辱心是」という句がある。この句から出た「柔和忍辱」及び「柔和忍辱衣」という表現は、『直談因縁集』所収話との関係が指摘される、『三国伝記』や『源平盛衰記』、また『太平記』といった文献に見られる。<sup>(注1)</sup>

拔苦与楽の御ン身ニハ黄金ノ光照耀シ、柔和忍辱ノ御ン眼ニハ青蓮ノ色分明ニシテ

『源平盛衰記』卷九「康頼熊野詣」

調<sup>二</sup>戒律乘急之心<sup>一</sup>、重<sup>三</sup>柔和忍辱之衣<sup>一</sup>、

『太平記』卷十二「公家一統政道の事」

その撰受と云ふは、柔和忍辱の貌となつて慈悲を先とし、

また、渋川版『御伽草子』の一つ『猫の草子』にも「いかなる柔和忍辱の阿闍梨なり共、命をたちたきこと勿論也」とある。<sup>(注2)</sup> 以上は、『直談因縁集』と関係が指摘される散文を中心に確認してきたが、『法華経』「法師品」から出た「柔和忍辱」及び「柔和忍辱衣」という表現が、『直談因縁集』を含む説話生成の場においても広く浸透していたであろうことが窺える。すなわち、『法華経』から出たこの句の広まりが、本話においては、「柔軟」の注釈でありながら「柔和」に引きずられ、忍辱太子譚と交渉しながら直談の場で語られていたと考えられるのではないだろうか。

#### 五、おわりに

『三国伝記』卷七——二十五

『直談因縁集』卷四「人氣品下」に収められている本話を中

心に据えながら、父の孝行のために目を抜く話、その中でも特に、忍辱太子譚及びそれに近い筋書を持つ直談系説話を広く見渡し比較を行いながら、生成の基底にあるイメージや言説の享受・展開について、その様相を明らかにしていった。結果、本話と⑦のお伽草子「釈迦の本地」とでは、成立に至る事情や目的が異なるため、表現面や語り口において大きな違いがみられるが、筋書としては、本話と⑦は最も近い関係にあると言えるのではないだろうか。また「法華経」の句から出た「柔和忍辱」という表現の多用・浸透が、本話が「柔軟」の注釈として、より忍辱太子譚に近いかたちで記された背景と考える。しかしながら、両眼を抜いても命は落とさず、クル孫仏の七日間の説法によって両眼が回復するというもう一つ重要な筋書は、忍辱太子譚からは見いだせず、これは、法華経直談の場で享受されてきた楊柳観音の靈験譚等の影響を受けているものと考えられる。

太子が自ら目を抜くという自己犠牲の描かれ方やその言説は、盲僧の始祖伝承や縁起にも見られ、重要なモチーフの関連性も見過ごせない。中世後期から近世前期にかけて、どのような言説が展開され共有されてきたのか、その土壌について、さらに今後詳しい考察を重ねてゆきたい。

注

注1 金英順「東アジアの孝子説話にみる自己犠牲の〈孝〉——忍辱太子譚を中心に——」『仏教文学』三十二号、二〇〇八年三月による。

注2 S A T大正新脩大藏経テキストデータベースによる。

注3 S A T大正新脩大藏経テキストデータベースによる。

注4 引用は注(1)に同じ。

注5 廣田哲通・阿部泰郎・田中貴子・小林直樹「日光天海藏直談因縁集 翻刻と索引」和泉書院、一九九八年による。以下、引用本文も同じ。

注6 『法華経』の本文は、岩波文庫本。及び中田祝夫編『足利本仮

名書法華経』勉誠社、一九七四年を確認したが、差異は無い。

注7 比較に用いた文献は、以下の通り。①『今昔物語集』(新日本

古典文学大系)、②『百因縁集』(名古屋大学電子化資料「古典

籍内容記述的データベース)、③『説経才学抄』(第Ⅱ期)真

福寺善本叢刊第三卷『説経才学抄』臨川書店、一九九九年、④

『私家百因縁集』(大日本佛教全書)、⑤『三国伝記』(中世の文

学『三国伝記』三弥井書店、一九七六年)、⑥『金玉要集』(磯

馴帖刊行会編『磯馴帖村雨編』和泉書院、二〇〇二年)、⑦『釈

迦の本地』(室町時代物語大成)、⑧『東大寺諷誦文稿』(中田

祝夫解説『東大寺諷誦文稿』勉誠社文庫、一九七六年)、⑨『言

泉集』(貴重古典籍叢刊6『安居院唱導集上巻』角川書店、一

九七三年)、⑩『一乗拾玉抄』(中野真麻里『一乗拾玉抄影印』

臨川書店、一九九九年)、⑪『鷲林拾葉鈔』(日本大藏経編纂会

編『日本大藏経第三十卷』講談社、一九七四年)、⑫『法華経

直談鈔』(国文学研究資料館データベースより)

注8 他の文献では、如来は卒塔婆に礼拝するのだが、『直談因縁集』

のみ、「草木」に礼拝していたと記す。単なる誤写であるのか、意図的改変の跡であるのかは不明のため今後の課題としたいが、複数の文献で、卒塔婆が陀羅樹などの木の下にあったとする記述は着目される。

注9 中野真麻里『一乗拾玉抄影印』六九四～六九五頁。

注10 金英順「東アジアの孝子説話にみる継子の目抜きと盲目開眼——クナラ太子譚を中心に——」『中世文学と隣接諸学1 漢文文化圏の説話世界』小峯和明編、竹林舎、二〇一〇年四月

注11 引用本文は、以下の通り。『三国伝記』（中世の文学）『三国伝記』三弥井書店、一九七六年）『源平盛衰記』（中世の文学）『源平盛衰記（二）』三弥井書店、一九九三年）『太平記』（岩波文庫本）。なお『太平記』本文は、古態本系統である西源院本を底本にした岩波文庫本を用いたが、当該部分については古態本系統と流布本系統の間に差異はない。

注12 引用本文は、日本古典文学大系による。

注13 他、歌題になった例もある。『続拾遺和歌集』卷十九「釈教」一三五二番歌の詞書にも「柔和忍辱衣」とある（辛島正雄氏御教示）。

注14 例えば『釈迦の本地』では、説話冒頭は「かくて、佛かへらせ給ふに、ひかう國に、ゆせんだらしゆのもとに、そとは有、佛、その木のもとに、ましく給ひて、そとはを、おかみ給ふ」と始まり、説話末尾は「此そとはの、くどくによつて、いま正覺なつて、十方衆生を、こゝろのまゝに、さいどする事也、此ゆへに、過去の恩徳を思へは、かたしけなさに、ねんころに、おかむなりと、の給へはほさつ、しやうじゆたち、是をうけ給はつて、おがみ給ひけり」と終わる。

〔付記〕 本稿は、伝承文学研究会第四三六回東京例会（二〇一六年十一月、於学習院女子大学）にて担当した輪講をもとに成したものである。席上等において貴重なご教示を賜りましたこと、深謝申し上げます。

（もり さとこ・九州産業大学准教授）